

平仮名は甘くない

宮澤 正明

このような実態の中で、小学校六年間のスパンで平仮名指導を俯瞰したとき、書写の授業において、低学年では徹底されるものの、中学年以降、漢字と比較して急激に平仮名を扱う時間や学習内容の占める割合が減少する

○文章における平仮名の役割

新聞を広げてみよう。読者の目に飛びこんでくるのは、大きな活字の見出しである。

新聞を広げてみよう。読者の目に飛び、
んでくるのは、大きな活字の見出しである。

（光村図書 国語教科書 五年（下）「ニュースを伝える」七二ページより）

私たちは文章を読む場合、漢字を追って読むといわれます。右の文で「新聞、広、読者、目、飛、大、活字、見出」漢字だけを拾って読んだだけでも大意をつかむことはできます。したがって、副詞、助詞、助動詞、送り

小学校で学習する漢字が千六字であるのに対して、平仮名は四十七文字で画数も少ないこと（画数平均・漢字約^{10.3}画、平仮名約^{2.3}画）、また漢字のように意味を持たず一字一音であることから、平仮名の読み書きは易しいとの考え方があるのかもしれませんが、確かに、文字数、画数、文字としての難解性において、いずれも漢字が平仮名を凌い（しの）いでいることは否定できません。しかし、次の点について考えると平仮名を侮（おご）ることはできないのではないのでしょうか。

○筆使い

○文章における平仮名の占める割合

文章で用いられる平仮名の占める割合は、漢字の約2

を整えて書ければよいというものではありません。

このように、文章を「書きやすく、読みやすく、速く書く」「速く」は中学校「書写」の目標」ということを観点にした場合、平仮名を適切に書く能力が要求されることは言うまでもありません。平仮名は甘くない、そして、その使命は実に大きいのです。

平仮名の字形の乱れは四年生から始まります。低学年で学習したことが薄れはじめ、自己流の書き方や、癖が出る時期に相当します。書写指導において低学年での平仮名指導を徹底することは勿論ですが、中・高学年においてもフィードバックして字形を確認するとともに、文中における漢字との調和を図る方法を絶えず指導したいものです。

その意味で、毎時の板書は格好の書写の視覚教材です。

板書文字 毎時毎時が書写指導